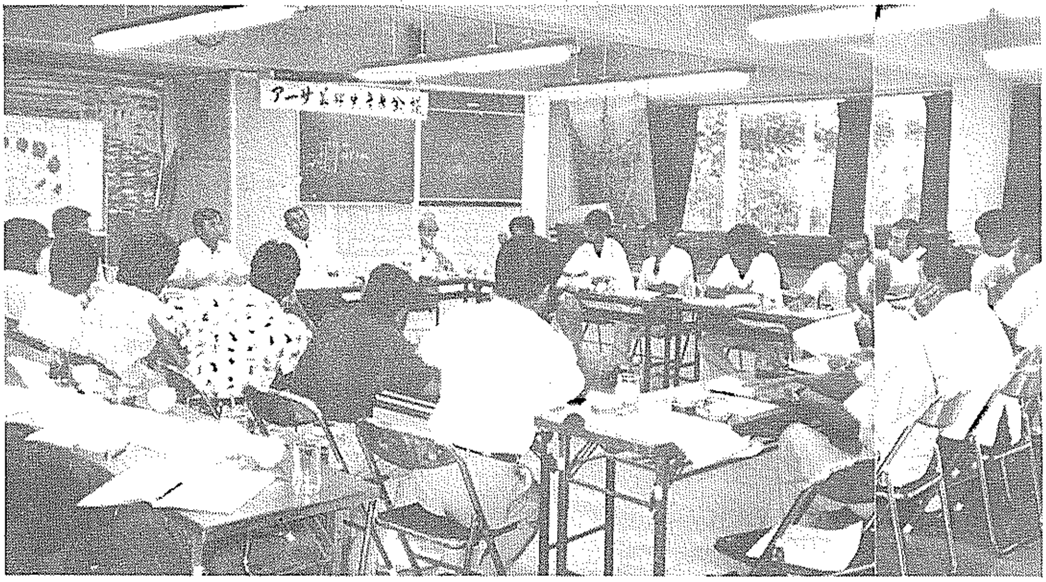
平成元年度ヒトエグサ養殖生産者会議の開催

養殖生産者が一堂に会し、生産技術を中心に意見交換を行い、養殖技術の向上を図る必要があり同会議を昨年から実施している。平成元年度は、(1)養殖生産技術面での問題点、(2)流通、販路面での問題点についてアンケート調査をもとに、意見交換を9月29日に水産業改良普及所会議室において開催された。

同会議のアンケート調査の問題点を列挙し、その解決の方向について検討した。

尚、当日は生産地である伊平屋、恩納、北中城、八重山、久米島の5漁協で23名の参加があった。

（専技室）



熱心に意見交換が行われたヒトエグサ生産者会議

各産地漁協からの報告をアンケート調査にもとづいて、(1)生産技術、(2)流通、販路面の問題点について列挙し、解決の方向について検討する。

1. **養殖生産技術面での問題点**

1）手摘のためおもいきった収獲ができず、回数も2回が限度である。地区によっては、1回適採で終えている所もあり、収獲の省力化が急がれている。

2）収獲後の洗浄から乾燥までの工程の段階で、特に脱水後の「ホグシ」から乾燥の工程が改善されてなく、処理作業にかなりの時間を要している。

3）近年、各地区とも赤土やその他の複合汚染が目だち、養殖網の管理に多大の労働力となっている。特に赤土の流出については、芽出しの段階で赤土の付着により、種網の洗浄作業を困難にしているためその対策が急がれている。

4）天然採苗時に雑藻の着生繁茂がいちぢるしく、その対策が急がれている。

2. 流通、販路面での問題点

1）一部の地域において、乾燥にガスを使用しているため、生産コストが高く、販売価格との調整がきびしいようである。

2）現在の所、販路については全く問題はなく、むしろ原料不足をきたしている。

3. 問題点に対する解決の方向

1－1）について：すでに、メーカーにより今村式ノリ摘機やアオノリ用としての改良型ノリペットが開発されている。その中の今村式ノリ摘機について、収獲試験を実施した結果、ヒトエグサ収獲機として十分使用できるものと考える。（ちなみに、1枚収穫するのに3分～5分であった。）

1－2）について：乾燥機については、これまで自家制の乾燥機を使用しておりましたが、平成元年度から恩納漁協において、「循環式椎茸乾燥機」の導入により、経済的で効率的な乾燥機として、十分使用可能なことが実証試験の結果明らかになった。「ホグシ」機については、製品として開発されていないが昭和60年頃に生産者とタイアップして、脱穀機を改良した試作機について試験した結果、脱穀機の歯を改良することにより、ホグシがある程度出来るが、2回ホグシをしなければならないという欠点がある。

1－3）について：赤土対策なくして、水産の振興は図られないといっても過言ではない。

養殖生産の場となっている浅海域は、年々泥海と化し、養殖網の管理も困難をきわめている。したがって、養殖網の赤土を落す方法を考えるのではなく、赤土を出さない方法について関係機関は、まじめに考えるべきではないか。

1－4）について：雑藻の駆除については、これまで各地で独自の方法で工夫されているようだが、一般的に効果を上げている方法は生育層のちがいを利用した駆除方法である。雑藻類の生育層はヒトエグサに比べると低い位置にあるので、駆除する場合は逆に雑藻類の生育しにくい高さに網を上げることにより駆除することができる。伊平屋地区では、この方法により成果を上げている。

2－1）について：1－2）で述べたように、経済的で効率的な乾燥機が恩納漁協で導入され、同地区で普及しているので、地域間で情報交換を行い検討してみる必要はないか。

2－2）について：県内のヒトエグサ養殖生産量は10トン（乾燥）程度であり、現在の所販路面での心配はないようであるが、今後各地で養殖され、増産体制に入った場合を考慮して、その対応策について、漁連を中心に各漁協とも取り組みを強化するための組織作りが必要ではないか。

現在の出荷体制は、各地区ともまちまちであり、漁協への一元集荷体制を確立すべきである。